キョンの憂鬱（その１）

ジョン・タイター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
キョンの憂鬱（その１）

【Ｎコード】
Ｎ７０８７Ｗ

【作者名】
ジョン・タイター

【あらすじ】
今日も今日とて、涼宮ハルヒが引き起こす非常識事態にＳＯＳが奔走する。今回は”キョン子”なる女の子が突如現れ、いつも以上にキョンが大変な目に！？というストーリーを予定してます。

プロローグ（前書き）

今更感アリアリな涼宮ハルヒの憂鬱の二次創作ものです。暖めてた内容をまったりと更新していくつもりですので、お付き合い頂ける様ですと嬉しいです。

プロローグ

■プロローグ

「世界が終わりに近づいている。その回避に必要なのは、あなた」

「……また、なのか」

動揺で視線が泳ぎ、どこかおかしいと感じながらも辛うじて問い返す。

向かい合った相手は黙って頷く。

こいつの言う事だから間違いないだろう。その言葉は、喧騒の余韻が残っている部室の空気を重くするには十二分の効果があった。

「前回はたまたま運が良かっただけだって。そんな大役が一介の高校生に何度も務まるはずがないだろう？他の誰かじゃダメなのか？」

「あなたしかいない。今度もあなたは思う様に行動すればいい。結果として、それが世界を救う事になる。ただ、あなたがここでのやりとりを記憶したまま行動した場合、非常に重大な事態を招く可能性がある。そのため、ここでの記憶は消去させてもらう」

はぁ。毎度毎度、すごい事をさらりと言ってくれやがる。

人の記憶ってのはそんな簡単に消せたり加えたりできるもんなのかね。だとしたら、嫌な思い出はキレイさっぱりと消してもらって、いい記憶を袋いっぱいに詰め込んだ状態にして、それを脳みそに書

き加えて欲しいってもんだ。

とは言え、今回も間違いなくあいつが絡んでる話なのだろう。まったく、まず記憶消去とやらの手始めに、頭の中からその男の記憶をまっさらに消してもらいたいもんだ。

頭の中で愚痴をたれていると視界がどんどん暗くなっていくのが分かった。目の前の彼がしてくれている事だと分かっているので不思議と不安はあまりない。そして瞬く間に世界は完全な闇に包まれた。

■第一章：テストのち大荒れ（前書き）

今更感アリアリな涼宮ハルヒの憂鬱の二次創作ものです。今回はまだ導入部分です。今後もお付き合い頂ける様ですと嬉しいです。

■第一章：テストのち大荒れ

■第一章

あっという間だったのか長かったのかがまったくもって判断つかない様な高校一年の夏休みを終え、非日常である休み明けのテスト期間中に輪をかけて発生したハタ迷惑な非常識事態も何とか乗り切り、俺を取り巻く日々が平凡な日常へと戻りつつあった。

とは言え、夏休みの生活で鈍りきった体を山の上にある学び舎まで運ぶというしょっぱい日常ではあったのだが、その苦労の先には可憐な朝比奈さんというあま～い日常も待っているかと思うと、これまた不思議と足取りが軽くなるというものだ。

「ちょっと待ちなさいよ、キョン」

まるで俺の浮かれた心を見透かし、咎めるような口調が俺の背後から降りかかってきた。9月だってのに残暑が厳しく汗水垂らして何とか登山している風体の俺を尻目に、そいつは急な上り坂を軽々と駆けあがってきて俺の目の前で止まりやがった。そんな事をするやつは、この世で一人しかいない。

「……狭い歩道の真ん中で、そうやって道を塞がれていると登校の邪魔なんだ。どいてくれ」

「バッカじゃない。あんた何時から私にそんな偉そうな口を聞ける様になったの？」

「朝っぱらから騒々しいな。俺は至極当たり前の事しか言ってない

のだが。ん？何か怒っているのか」

「何で私が怒ってなきゃならないのよ。登校中に、た・ま・た・ま、偶然、あんたの姿が見えたから忠告しにきてあげたってワケ。あんたバカだから気付いてないかもしれないけどＳＯＳ団の無断欠席記録、あんただけ連続５日を越えてるわよ」

「は？先週はテストだっただろうに」

それにお前さんは全く気が付いてはいないのだろうが、テストに加えて、俺達はお前のお守りですこぶる忙しかったんだ。おかげでテストはボロボロ。しかも、こいつはそのボロボロだった結果をネタにバカにするというオマケ付き。ええい、腹が立つ。

……少々話がズレたが、当時はテスト勉強が出来る時間も限られていた訳だから、一分一秒が勿体ないと考え部室には寄り付かなかったというのもいたし方がないところだと察してもらえよう。ただし、それを本人に直接言う訳にもいかず、バカにされても只管こちらは黙って大人の対応をしてるというのにこいつときたら。

「あんた本当にバカね。ＳＯＳ団には休みはないってテスト前に言ったの、覚えてないでしょ」

「……あ～、あれ。あれって冗談だろ。朝比奈さんや古泉も出てないって言ってたからな」

「ん？まるでテスト中もみんなにあってた様な口ぶりね？」

「あっ！いや、何だっ！そうそう、テスト前にかる～く聞いてみたんだった。忘れてた」

「ふふ、あんたやっぱりバカね。騙されてたのよ、み・ん・な・に。あんた以外はみ～んなテスト期間中も部室に来てたわよ。もちろん私も含めて、ねっ！」

なにっ！？ハルヒを除くメンバにはテスト中にも関わらずほぼ毎日会っていたのだが、そんな話題これっぽっちも出てなかったぞ？

危うく、その禁断のフレーズが口から零れ出そうになったのを寸でのところで何とか止めたが、そんな俺の動揺が伝わったのか、それとも謎の電波を受けたのかは分からんが、徐々にハルヒの顔にこざかしい笑みがこぼれでてくる。

「今日から行く予定だったんだ。それで許してくれないか？」

「ダメよ。そんな普通の事じゃあたしの気が済まないわ。あんたみたいなダメ部員は本当なら厳罰に処するところだけど、あるゲームをしたら許してあげようかなって思ってるの。ゲームの内容はもうみんなで決めてるから今日は絶対に部室に来なさいよねっ！」

……いや、その話を聞いて部室に行く奴はいないだろ。ハルヒさんよ。それに何だそのゲームって、おい。

「あ、万が一部室に来なかったら、あんた明日から学校に来れないようにしてやるからそのつもりで。私は、ゲームの準備で忙しいから先いくわ。じゃあね～」

言い終わると、俺が口を開きかけたのを気にも留めずに振り返り、もの凄い速さで坂を駆け上がっていくハルヒを見ながら、その日、最初のため息をついた。

「断じて断る」

退屈だった授業も終わり、これまたさっぱりと気が乗らない重い足取りの俺を残してハルヒのやつはさっさと部室に行きやがった。何をそんなに浮かれているのかね、と今朝の話題はあえて意識しない様にしながら部室に向かった訳なのだが、部室について俺の認識が甘かった事を悟った。

俺を待っていたのは、ゲームはゲームでも罰が付くゲームの方で、ハルヒ主催・俺主演の一方的なリンチの場だったのだ。俺が知っているゲームというのは将棋やチェスといった多少なりとも互いの知識を競って、かつ、勝敗にはギャンブル性が絡んだ手に汗握るもの、と認識していたのだが、ハルヒ的にいえばゲームというものは自分の思い通りに相手をいたぶれる事と同義のようなのだ。

「謀りやがったな、古泉」

「申し訳御座いません。ただ、私がここに居る意義というものを考えていただけると、この行動が私にとってベストの選択だと分かって頂けると信じてます」

くそっ。相変わらず嘘くさい０円スマイルを俺に向けやがって。ええい寄るな、顔が近い。

「はいっ、そこの男性諸君っ！こそこそと内緒話はしないっ！キョン、あんた負けたんだから言う事を聞きなさいよねっ！」

「いや、ちょっと待てよハルヒ。俺はまだゲームとやらもしてないし、なんも負けちゃいない。それに、そんな事をするとも一っ言も聞いていないぞ。これじゃ、そこいらのヤクザの方がまだマシだろ……って、何、着々と準備を進めてやがるっ！この野郎っ！」

「今更何いっても無駄よ、アンタがテスト中に部室に来なかったのが決定的な敗因なの。それと今朝の事は、伝える際、ただ単にゲームの前に”罰”って言葉を入れ忘れてただけじゃない。相変わらず、細かいところばっかり気にしてるわね～」

「ふっざっけんなっ！そもそも毎日部室に来いって、じゃあ何でテスト期間中、毎日顔あわせてるのにお前は俺を部室に連れてこかなかったんだ！？一言くらいあっても良かったんじゃないのかっ！」

「バッカじゃないの？そんなの、あんたの女装すがたが見たかったからに決まってんじゃないっ！！」

……そうなのだ。

ここには俺を除いた美男美女が４人も揃っているというのに、こいつは事もあろうに、ごく一般的な容姿しか持ちえていないこの俺の女装すがたが見たいだとぬかしてきやがったのだ。無論、そんな趣味や嗜好を持ち合わせていない俺は嬉々としてしてその提案を受け入れる筈もなく、先ほどから不毛な言い争いを続けているところだった。

俺が着いた時には既に部室には全員が揃っていた様で、古泉は完全にハルヒの子分の状態でこの状況を楽しんでやがる。ええい、忌々しい。一方の女性陣といえば、朝比奈さんは既にメイド服に身を包み、オロオロとしていて実にかわいらし……ゴホン、大変そうで

ある。長門は相変わらず我関せずといった様子で分厚い本を一人黙々と読んでいる。

そしてハルヒのやつは朝比奈さん用として用意しているコスプレ衣装とは別に、いたるところにフリルの付いた、そして明らかにサイズのでかい真っ赤なドレスを部長の机の上で、はためかせてやがる。その様子はまるでドラクロワって人の何とか革命って絵の女性にそっくりだ。いや、それはドラクロワに失礼か。

「涼宮さん、衣装でしたら、わた……」

「みくるちゃんは黙っててっ！」

「はひぃ！」

大凡、下級生が上級生に接する態度ではない。ハルヒに一喝されて子猫の様に怯える朝比奈さんがとても可哀想に思えるが、もっと可哀想な状況にある俺としては、もう少しハルヒのやつに食い下がって欲しかったところです、はい。

「このままじゃ収まりがつきませんし、ここは一つ妥協案を提示しようと思うのですが如何でしょうか？」

古泉が顔を近づけてきて、ボソッと呟く。

「なんだ、言ってみろ」

「男性陣が女装を、そして女性陣は男装をする、と提案するのはどうでしょう？あなたはどちらにせよ女装するという運命から免れる事は出来ませんが、上手くいけば、一人で女装するという気恥ずか

しい状況からは逃れる事が出来るかもしれません。さしずめ”ＳＯＳ団のコスプレ大会”となり、あなたが請け負う負担が分散されるかと思うのですが」

「……それでハルヒの気が済みそうなのか？」

「乗ってきましたね。今のお返事、了解だと受け取りましたよ。お任せください」

そう言うと古泉は素早くハルヒの方に向き直り、先の提案を進言しだした。

「……という事で、失礼ですが彼一人だけに女装をやらせても非常につまらない結果となるでしょう。そこで、如何でしょうか、涼宮さん？もし涼宮さんが先ほどの提案を了解して下さるのでしたら、ＳＯＳ団全員の一風変わったすがたが拝見できると思います。例えば、長門さんの学ラン姿とか朝比奈さんの海賊姿とか、私も微力ながらチャレンジさせて頂きますよ。そして、その手の衣装を用意できるのが私の知り合いの中には多少おりますので、もし明日まで待って頂けるのであれば、全員分の衣装をご用意出来ると思いますよ」

「面白いわ、それ採用っ！！さっすが副部長っ！」

「ありがとう御座います」

そう言うと、古泉はウィンクを何故か俺に向かって投げかける。やめろ、気色悪い。送る相手を確実に間違っているだろう？そうでなければ、頭が少々腐っているに違いない。

「キョン！今日のところはこれくらいで勘弁してあげるわ。その代

わり、明日は色々な衣装を着させてやるから、そのつもりで覚悟してなさい。じゃあ、今日は解散ね！」

そう言うとハルヒは5分もしないうちに支度を済ませてさっさと帰ってしまった。さっきまでの意気込みは何だったんだ？と疑うくらい潔い帰りっぷりである。

さっさと帰ってしまったハルヒを除いたメンバは、まったりと部室で時間を過ごした後、日が陰ってきたの契機に帰り支度を始めていた。まだ9月の中旬だというのに日が落ちるのは随分と早くなったもんだ。

「ところで、ハルヒのやつは急になぜ俺の女装が見たいだなんて事を言い出したんだ？」

「多分、キッカケはそれ」

長門がハルヒの机の上を指した。乱雑に数冊の本が置かれているが、何々。

「触らないで」

「ん、どうした長門？怖い顔して」

「まだ分析中」

「……どの本の事なのかさっぱり分からんが、長門がそう言うなら触るのは止めとくよ」

「そう」

そう言うと、長門有希は機械的に瞬きし、注意して見ていないと解らないほどの微妙な角度でうなずいた。面持ちが若干厳しい様に見えるのは俺の気のせいだろうか？

「でも、明日は大変ですよ？あなたが居ないと始まらないコスプレパーティーですからね」

「キョンくん、頑張ってください～」

「はい朝比奈さん。有難う御座います」

朝比奈さんには努めて明るく返事を返したつもりではあったのだが、そう言った俺の顔は正に苦虫を噛み潰した様な顔をしていた事だろう。俺がハルヒの様な能力があれば、間違いなく明日という日は来ない様に世界を改変するだろうな。そう思うと、その日何度目か分からないため息をついた。

その後、明日の事で頭がいっぱいとなっていたのだろう。夕食も風呂も上の空で、かわいい妹の相手もせず、もともと勉強はする気がなかったので、さっさとベッドに入ってしまった。

……明日は人生最大の汚点となること間違いなしだ。今後の高校生活の在り様は、その汚点による被害を如何に最小限に食い止めるかにかかっているといっても過言ではないだろう。俺はその対策を練るべく必死に考え様とした……のだが、ベッドの上という、ものを考えるのには最悪の場所だったワケで、ものの１０秒も持たずして深い眠りへと落ちていってしまったのは仕方のない事である。

翌朝、目覚ましのベルが鳴ったのを止めて、俺が体を起こすのと同時に何か物体が動くのを感じた。ははあ、ピンときたね。昨日、全く構ってやんなかったので、多分、妹のやつが部屋に潜り込んだのだろう。前々からあれほど夜中に潜り込んじゃいけませんと何度も言っていたのに妹ときたら。今回の件を注意するのに託けて、呼び名を「キョンくん」という特異なものから「お兄ちゃん」という普遍的かつ良識的な呼び名に戻すようにしようと画策しながら、妹がいるであろう方向に目を向けた。

「……あんた、だれ？」

見知らぬ女性がそこに居た。

■第二章：カインとアベル、もしくは犬と猿？（前書き）

今更感アリアリな涼宮ハルヒの憂鬱の二次創作ものです。今回はキョン子とのやりとりがメインです。まだまだ導入です。
それと書くのが遅くなりましたが、原作の世界観が壊れるのが苦手な方や性転換ものが苦手な方は戻るのをオススメします。それでもＯＫという方は今後もお付き合い頂ける様ですと嬉しいです。

■第二章：カインとアベル、もしくは犬と猿？

■第二章

「……あんた、だれ？」

目の前の女性が、開口一番、無愛想に言い放った。

「……おまえこそ、だれだ？」

反射的に質問に質問で返してみたが頭がまわっていない。あれ、妹は？こいつは妹か？いや断じて違う。俺の妹はもっと可愛げがある目をしていた筈だ。少なくとも目の前の女性の様に、間違ったら視線で人を刺し殺せるんじゃないかと見間違うほどの鋭い目はしていなかったはずである。

昨日気付かぬうちに目の前の女性と恋に落ちて情熱的な夜を過ごしたとか？いやいやいや。断じてそんな事はなく、ごくごく平凡な夜だった筈だ。じゃあ、一体こいつは何者で、なんで俺の部屋にいる？

朝、家族以外の女性と一緒に起きて過ごすという、思春期も中盤にさしかかった健全な男子ならばちょっとくらいは憧れるであろうシチュエーションにもかかわらず、その女性についての記憶がないので全く萌えない。いや、実際のところ萌えるなんて、そんな余裕はこれっぽっちもなく、俺は記憶障害を患っていて今までの事はぜ～んぶキレイさっぱり夢でした、なんて事なんじゃないかと疑ってしまう。

さすがに色々と非常識に巻き込まれてきたが、……ん、俺はそこで漸く閃いた。アイツが絡んでいる事じゃあないか？そう、そこに

いるのは勿論ハルヒではない。ハルヒではないのだが、こんな非常識な事態にアイツが絡んでいないワケがない。ならば簡単だ、この非常識な事態について相談ができるやつらがいるって事だよな。

徐々に冷静になってくる自分を感じつつ、部屋についても横目で見ながらチェックしてみると配置がすべて変わっている事に気が付いた。何故か部屋の真ん中に仕切りカーテンが設置されており、その向こう側には俺が愛用しているものと同じ形であったが、色違いであるベッドと机がそれぞれ一つずつ増えている。家具の使い込み具合を見ると昨日今日に購入した新品ではなく、随分と使い込んだものである事が一目で分かった。俺の家のようで俺の家ではない。ここは一体どこなんだ？

そして全開になっている仕切りカーテンの向こう側、部屋の配置から言えば俺が寝ているベッドとちょうど反対に位置する場所に置かれているベッドの上で、その女性はまだこちらを睨んだままであった。俺より幾分か冷静な態度をとっている様に見えるが、向こうも状況が飲み込めていないのか頻りに鋭い目が不安げに動いている。改めて冷静になって見てみると、その女性はどちらかといえば少女といった方が近いのだろうか。年でいえば１４～１５歳、せいぜい中学生の後半といったところか。

「おい、そこの男。黙ってないで質問に答えろ」

「ちょっと待て。まず、お前は誰なんだ？名前を教えてくれ」

「……失礼なやつだな。人に名前を聞くときは、まず自分から名乗るのが礼儀だろう」

あ～……あれだ。開口一番にあんただれ？と聞いてきた人物と同

一人物とは思えない様な台詞を吐いたのが少々気にはなったのだが、これ位の理不尽なやり取りはハルヒとの付き合いで耐性がついている。敢えて、そこには触れてやらずに俺から名乗る事にした。

「俺は……」

「二人とも、おっはよー！遅刻するよー。キョンくーん、キョン子ちゃーん」

「「なにっ！？」」

俺とこの少女との邂逅は、突如現れた妹という名のタイフーンに見事に吹き飛ばされたのである。

「……じゃあ、もう一回聞くが、こいつと俺は双子って事になってるんだな？」

「う～、双子なんだけど～。二人とも今日はどうしたの～なんかこわい～」

「ちょっとあんたってば、朝っぱらから妹を脅かしたらダメだろ。ゴメンな、お姉ちゃん達ちょっと寝ぼけてたんだ」

「ほんと～？」

「ほんとうさ」

そう言うと少女は鋭い目つきをこちら目掛けて突き刺してくる。

それと同時に妹の可愛い瞳が不安げに俺を見上げてきた。ひっ卑怯な！？この状況では俺だけが完全な悪者じゃないか。こんちくちょうめ。

「そう……そうだったな。すまん、妹よ。お兄ちゃん達、寝ぼけてたんだ」

「ほんと～」

「うん、そういう事にしといてくれ。こんど何か買ってあげるから」

「それじゃあ、まるで買収だろ」

おい、目の前にいる女、俺が考える様な事をぼそっと呟かないよーに。

「うんわかったー。いつものキョンくんに戻ったねー。下でパン用意して待ってるよー」

買収の効果が抜群だったのか妹の機嫌は瞬時に直り、トントントンと小気味良い音を立てて階段を下りていった。簡単に買収される妹の将来も不安ではあったのだが、今は現在進行形で漂っているこの緊張感、もとい、目の前の少女に対する不安の方が勝っている。

「……おい」

「……何よ」

「ここはどこだ？」

「わたしらの家なんだろ」

「おまえ、そんな意味で聞いた訳じゃないの分かっててワザと言ってるだろ」

「知らん。というか、わたしも知りたい。それとあんたみたいなでっかい弟がいた覚えはない」

「……俺もお前の様な目つきの悪い妹を持った覚えはないよ」

やれやれだ。

俺らがこの世界で双子というのも何となくだが納得できる。というか、今のやり取りだけでも思考回路が遺伝子レベルで似かよっているってのが分かる。ここだけの話……今階段を降りてった妹よりも近しいものを感じちまった。

そして、お互い、次に何をすべきか分かっている様で黙々と学校に行く準備を始めた。部屋の配置が変わってしまったため、どこに何があるのかいちいち探さないと分からない。あいつも俺と同様あっちこっちの引き出しを出したり閉めたりを繰り返してるので、俺と同じ境遇であろう事が見てとれる。少なくとも元々この世界にいた住人ではなさそうだ。であれば、これも認めたくはないのだが、この状況下において同じ行動をしている上に余計な質問をしてこないのを見ると、非常識な事態への対処法なども、多分、この俺とほぼ同じ答えに辿り着いている事だろう。

そう、この状況を説明出来る可能性があるとすれば、目の前で混乱している双子とかいうやつなどではなく、何事にも我関せずといった様子で分厚い本を、いつも一人で読んでいるあの少女、もとい、

あの宇宙人だけ、だとな。

「念のため言っとくが、こっちは向くなよ」

いよいよ持って着替えるのか、真ん中の仕切りカーテンを復活させつつ、ジト目でこちらを睨みつけながらそう呟く。

「それじゃあ、逆に見てくださいって言ってるようなもんだぞ。気をつけろ」

敢えて気にしていない風体で言動に対して注意をしながら、横目でチラッとあいつの姿を見た際に気が付いたのだが、顔立ちに関しては中々どうして整っている方だと思う。肩から腰にかけた髪は非常に細く、流れるようで癖がない。鋭い目つきは現在進行形で維持しており相変わらずだったが、悪いのは目つきくらいのもので結構キレイな目をしてる……と思う。鼻筋も多少低いがスッと通っているので、今の段階では目を引きつける様な美人という訳じゃあないが、これからの成長が楽しみな少女といった風体である。

ただし、そろそろ第二次成長期も中盤を過ぎて終わりに差し掛かる状況なので、童顔で背が低くて……それでいて多分幼児体系だろうと推測してるため、完成形を見る事が出来るのは随分先になるか、それとも永久に来ないかのどっちかであろうが。

そういえば、こいつは先ほど妹にキョン子って呼ばれてたな。という事は、もし仮に俺が女になった場合にはこいつ様な姿になるのだろうか。もしそうならば、男である時の俺とはエライ違いである。

正直、自分が女になった姿というものは想像もしたことなかっし、これからもしたくはなかったのだが、こいつの様な容姿であるならば、逆にちょっとくらいは女になってみても良いかなーと思えてしまう自分がいるのがちょっと怖い。

「……はぁ」

仕切りカーテンの向こう側から俺と同じ様なため息が何回も聞こえてくるので、仮に女の姿になったとしても俺は俺自身であり悩みのタネは尽きないのだと悟る。それに、こいつはこいつなりに、例えば発育の事で心労があるのかもしれないな、などとセクハラおやじ紛いの事に思い巡らせながら、ふと時計を見るとそろそろ出発しなければ遅刻となる時間に迫りつつある事を悟った。

「おい、早くしろ」

「……」

「どうした？」

「……スカートがない」

「は？用意してから着替えたんじゃなかったのか？」

「うっさいな。わたしだって気が動転してるんだ。こっちには……あれ？なさそう……かな？もう一度探してみるが、そっちにもないか、ちょっと見せてくれないか？」

うおっ！？着替え途中だと思われる状況で、仕切りカーテンの合間から顔だけこちらにだすんじゃない。双子といっても今日初めて

会ったんだから兄妹で変な妄想を抱きかねないだろうが。それにわざわざ仕切りカーテンの向こう側に自分の服があったら仕切りカーテンの意味がないだろう？と心の中で突っ込みをいれながら、一応、俺の部屋を見回した。

「ん？……あれか？」

先ほどあいつが制服を探していた時に、服を出しては投げ、出しては投げをしてたが、その中の幾つかがこっち側に侵攻しており、その中に北高の女子が付けている様なスカートが紛れ込んでいた様だった。そもそも男の俺はそんな散らかすほど多くの私服は持っておらずオシャレにもあんまり興味がないのだが、そこは双子でもやはり女性になると服装とかには何かしらの興味が出てきたりするのだろうか？分からんもんだな。

「んー……あっ、それだっ。よし、おいしょっ、と」

「あ、ちょっと待て。取ってやるからバカな事は止めろって」

「冗談だろ。スカートに指一本でも触れてみろ。承知しないからな。ほっ、とっ」

そいつは仕切りカーテンから腕を伸ばしてスカートを取ろうとする。もちろん、仕切りカーテンにはそいつの全体重がかかるワケで、いくら体重が軽そうだと言ってもそんな事をすれば、どうなるかは自明の理の筈なのだが、全く意に介していない。慌てた俺は次に起こるであろう悲劇を回避すべく駆け寄ったが、今一歩のところで間に合わずソレが起きてしまった。

ビリッ！

「えっ？きゃあっ！！」

……案外、可愛らしい悲鳴の後に、トスンと軽いものが落ちる音がして仕切りカーテンが床の上を波打った。その上にはモチロン盛大に倒れこんだあいつの姿が見てとれる。その姿は、先ほど想像した通りの上はセーラー服、下は……な姿であったのだが。……そ、そこは全世界に誤解なきよう誓って宣言しておくが、これは故意じゃない。事故である。なので俺の責任は1ミクロンたりともありはしない、不可抗力なのだ。そこんところ、間違えないように。

それはこいつも分かっているのか、特に文句も言わず、そのアクシデントからものの2分もかからず学校に行く準備を完了させた。

「……すまん。少々手間取った」

「いや、今日のところはしょうがないだろ」

「ん、カーテンとかは帰ってきたら直しとく。それでいいか」

「ああ。ここに散らかっている服とかもな」

「分かってる」

それなら良し。それと、あとはこれだけは言っておかねばなるまい。

「兄として、一つ気になったので言わせて貰う。お前はともすればちびっ子に間違えられ兼ねないっ！いーや、確実にちびっ子に間違えられるっ！だからなのか、しょうがない面もあるが、せめてパン

ツくらいはもう少し可愛げのあるパンツをはく事だ。間違っても、今はいている様なお子ちゃまプリントパンツは止めてお、げふっ！！」

俺が言い終わる前に、音速を超える様な鋭い右ストレートが、俺の左ほほを盛大にぶちぬいた。

何？今のは確実に俺が悪いって？確かにそうかもしれない。そうかもしれないが、仮にも俺の双子の兄妹とやらが、高校生にもなって小学生の妹がはくようなクマさんのプリントパンツは如何なものか。というか、そんなところで妹との共通点を主張してくれなくても良いから。

そのような事を考えながら、倒れ行く意識の中、俺は一種の違和感を感じた。

例えるなら、そう、それは閉鎖空間に入ったときの様な何ともいえない感覚だ。殴られるという行為で図らずして接触したのだが、これは用心した方がよいと俺の心の警報が鳴り響く。

そして俺とこいつは思考回路はかなり近いものを持っているかもしれないが、何かこう……近すぎて相容れない。何かあれば、互いにぶつかって違いを許容できないんじゃないか？といった脅迫観念みたいなものが漠然と沸き起こる。

もし、その考えがもし当たっているとしたら、そんな危険な関係である俺とこいつがなぜ此処にいる？なんで俺なのだろう？そして、こんな状況を作りだしたのは、十中八九、ハルヒであって、あいつはこの状況で一体なにをしたいというのだろう？

それらの答えは……残念ながら俺の頭じゃさっぱり分からなかっ

た。

■第三章：ありふれた異世界の朝（前書き）

今更感アリアリな涼宮ハルヒの憂鬱の二次創作ものです。
原作の世界観が壊れるのが苦手な方や性転換ものが苦手な方は戻るのをオススメします。
それでもＯＫという方は今後もお付き合い頂ける様ですと嬉しいです。

今回はようやく長門さんが登場。話は動きつつありますが、やっぱりまだ導入。

ちなみに原作は消失くらいまでしか読んでません。
なので原作と矛盾が出てくる点が多々あるかもしれません。
それでもＯＫでしたら、、、嬉しいです。

■第三章：ありふれた異世界の朝

■第三章

忌々しい、朝飯食えず、腹減った。

俺の頭の中で流れている川柳とは全く無関係である様な、傍から見れば潤いのある学園生活を満喫してます風に見える二人……すなわち一組の男女が仲睦まじく登校している最中にも見えなくもない状況ではあったのだが、よくよく見ると内情は全くの逆であり、お互いイライラが最高潮を向かえながら並んで歩いている二人がいた。そう、この俺とキョン子と呼ばれたこの女の事である。

時間は少し遡るが、学校に行く準備が出来て俺が余計な一言を指摘してしまうまでは、俺の一方的な感覚では良好な関係だったと信じているが、先ほどの接触により俺が直感的に感じてしまった違和感というか焦燥感といったものを、この女もやはり感じとったらしく微妙な変化が見てとれた。

まず第一に意図的に俺を避けるような仕草をするようになった。まあ、あんな嫌な感じが付き纏うなら仕方がないだろうがな。俺もあの感覚は好きではないので、あまり傍らには居たくはない。

そして第二、常に俺を睨みつける事。これもデフォルトの目つきがそうなんだろう。だが、俺の時だけ特に厳しい様に感じるのは何故なのか。

それと第三、今度は俺だけが例外なのだが誰に対しても妙に余所余所しいところがある。全くもって謎なのだが妹や家族に対して何

か反応が変だったのも気になるところだ。
そして最後、これは微妙な変化とかはまったくもって無関係かもしれないが俺にとっては大問題である。そう、髪型をポニーテールにしやがったんだ。こいつはよ。

「……これは反則だろ」

隣で揺れていたポニーテールを見た際に思わず呟いちまった一言を猛烈に後悔したが、幸いにも俺の前を通り過ぎたこの女には聞こえなかったらしく、何事もなかったか様に階段を降りていく。
助かった。先ほどはちびっ子呼ばわりしてみたのだが、俺の好みの髪型だからなのかこの髪型だと年相応に見えてくるから俺の感覚もいい加減なものだ。あの違和感さえなければ、とても良好な関係を築けたことだろう。
いやいや。本当にこんな微妙な変化だけだったら、こんなに腹なんか立てない。問題は朝食だった。

この世界では双子の認定をされていたので朝食も当然二人分が用意されていたのだが、勿論、それを食べていると遅刻となる時間……ギリギリアウトであろう時間線上に立たされていた訳で、俺としては簡単に摘めるものだけ口に放り込んで後は昼まで持たせれば良い、と考えていた。
実際のところ俺の朝食はその様なメニューが並んでいたし、この世界に元々いたのであろう俺も同じ様な感じだったのだと多少の安堵感もあった。だが、目の前にいるポニーテールの女ときたら、事もあろうに二人分の朝食を物凄い勢いかきこむと、あっという間に平らげてしまったのだ。
その様子ときたら、巨大恒星を飲み込む小さなブラックホールと

いった体であった。いや実際にそんなものは見たことはないのだが、この小さい体の何処に収まったのだろうか？不思議でならん。

「ごちそうさま……って、え？これ一人前じゃなかったのか？」

二人分の食材を胃袋に収めた当の本人からは贖罪らしき言動はなく、むしろ何を怒っているのかといった物言いである。そんなアホの子のために俺は朝食抜きが決定し、何ともひもじい思いをしながらの登校となってしまったのだ。元々そんなに食べるつもりではなかったので身体上には特に何ら影響は与えないのだが、これは気分の問題であり精神衛生上宜しくない。何とも虫の居所が悪いのだ。

「あの……さ、ちょっと、いいか？」

くそっ！チーズと豊水くらいは俺も食おうと思ってたんだ。午前中の授業を乗り切るための貴重な栄養源を横取りされたことを心の中で悪態を付きながら歩いていると、横で歩いているやつが呟いてきた。

「……昼飯なら頼まれてもやらんぞ」

うむ。我ながらしつこいな。

「朝飯の事は何度も謝っただろうが。そうじゃなくて」

「何だ？」

「わたしらの間でも、ちょっとした情報の整理をしてみないか」

「情報の整理……ね」

「ああ、この世界がどうなっているのか正直まだ分からんが、二人の世界について情報を整理しておけば今後何かの役に立つかもしれないだろ？」

「そんなの長門に聞けば良いんじゃないのか？」

「まあな。ただこの世界はわたしが知ってる世界と随分と違うもんで……正直に言うと、あんたのところとはどうなのかなって思ったんだ」

ほう、この短い時間にそんな言うほどの違いなんてあったかね？俺からすれば部屋の配置が違う事、お前がいて双子認定されているって事、それら以外には特に変わった点なんか無かった様に思っているが。

それを目の前の女……ええい面倒だ、こいつのことは以降キョン子と呼ぶことにする。異論は認めない。それがキョン子にとっては、違いだらけの世界に来てしまったって事なのか？その旨の内容をキョン子に伝えると、少なからず衝撃を受けたのか下を向いてしまった。

うむ、やはりこうやって伏せた顔を横から見ても、キョン子ってやつは少々ちびっ子なところがあるが結構可愛い部類に入るのだなと不謹慎ながらも思う。谷口に言わせればAランクには入るのではなかろうか。いや、いかんいかん。ここで双子設定を思い出し、先刻の考えは封印する事にした。

まあ結構可愛い子と並んで一緒に歩けるという、多少の優越感くらいは許してほしい。

「さっきのは……妹だったよな？」

ああそうだ。俺の妹は何処から見ても妹だっただろ。

「そうか。お前の世界ではそうだったんだな」

なんとも奥歯にものが挟まった様な物言いだ。

「わたしの世界では……あの子は弟だったんだ」

「は？」

「それと先刻から周りを見てるが、知ってるやつが一人もいない」

「俺も知ってるやつなんてあまりいないぞ？意識しすぎじゃないか？」

「ああ、そうかもな。けどな、知ってるやつは一人もいないが、知ってるやつに似てるやつらはチラホラいるんだ。ただ……みんな、男と女が別というか……なんというか」

ちょっと待て。こいつはさっきから何を言っている？

「つまり……性別が逆なんだ。女が男になって、男が女になって見えるってことだ」

うん？正直、分からん。

「俺がいた世界とは何ら変わらんが。じゃあ何か？ここはお前のい

た世界とは性別がアベコベになってるって事か？」

「……どうやらその様だ。詳しくは長門に聞かんと分からんが」

そうだ、長門だ。長門に聞けばもう少しは色々と分かるだろう。こいつが言っている事が示す可能性、それは今いる世界が元々俺の世界であるのか、それとも俺の世界に近いってだけで全く別の世界であるって可能性が……って、ん？ちょっと待てよ。もしや、こいつの世界じゃ？

「あいつらも？」

「多分、想像してる通りだろ」

「じゃあハルヒは？」

「ハルヒ？……ああ、ハルヒコのことか。ここだと女なんだろうな」

……ハルヒコか。嫌な予感がした俺はそれ以上深く聞くのを止めといた。

「おい～っす、キョン子」

「おはよう、キョン、キョン子さん」

俺の思考の停止を遮る様なタイミングで、後ろから俺らに向けて挨拶が聞こえてきた。アホの谷口と国木田である。

ちょっと前までの会話を思い出し、こいつらの女のすがたを一瞬

想像しかけて浮かびかけたビジョンを揉み消した。うむ、こいつらが女の世界なんて考えられん。特にアホの谷口が。
だが俺の横にいるキョン子にとっては違うらしく、男のこいつらを見て明らかに動揺しているのが見てとれる。先ほどの話から、キョン子にとっては性別が逆転した別の世界に来た事が確定し、同性の友人が急に男になっちまった感じなのだろう。性別が逆転した別の世界に来た訳だから、その恐怖たるや、どうやら俺の比ではなさそうだ。

……やれやれ。

この世界じゃキョン子が見知ったやつ、それに友達と呼べるやつが一人としていない状況になっちまったって事で、それを理解できるヤツもこの世界にはあまりいない。ここは事情が分かっている俺が多少フォローをしてやる必要がありそうだ。
このよく分からん世界で俺だって気持ちをもてあましてるってのに、またひとつ面倒ごとが増えた事に頭を痛めながら、ため息をするのは止めといた。

「お前ら、遅刻スレスレの俺らより遅いとはどういうこった？」
かなりのスピードで走り寄ってくる谷口と、その後ろをゆっくり走ってくる国木田に対してキョン子の前に立ち塞がる様に僅か移動しながら言い放つ。双子の設定であるこの世界でならば、この挨拶で間違いはないはずだ。
「キョン、邪魔」

ん？谷口が俺をスルーしたと思ったら、キョン子の目の前に回り込む。キョン子が、ヒッと怯む声が聞こえてきそうなほどビビッているのが分かる。

「キョン子～。今、映画のチケット持ってんだけど、放課後に一緒に行こうぜ」

ん？

「ま～た、キョン子さん誘ってるの？一回もＯＫ貰った事ないくせに」

「そこ、うるさいぞ」

「ほら～、キョン子さんもまた怒ってるよ。って、あれ？どうしたのキョン子さん？」

「おっ！今日こそはＯＫって事だよな？」

……こんな展開、俺も初めて見るのだが。

というか、一体なんなんだこの世界は？谷口にはアホに一層の磨きがかかってそうだ。それに俺がいつもアホな事を言ってる谷口に対して薄情なのは許せるが、その逆で俺がスルーされるってのは、かなり腹が立つ。

「アホッ、返事はもちろんノーだ。というかいい加減にしろ。マジで遅刻すっぞ。ほら、おまえも行くぞっ」

茫然自失といった感じで完全に思考が停止してたと思われるキョ

ン子の代わりに谷口の申し出をハッキリと拒絶し、カバンで小突くとキョン子がハッと我に返る。

今のお前の気持ちは分かってあげられないが、谷口のああいった態度がとても気持ち悪いものだというのは男の俺でもよく分かる。俺はアイコンタクトで谷口は無視しろと合図を送りキョン子がそれに頷く。その後、声をかけ続けるアホを二人で小突いたり引き離したりしながら、漸く学校の下駄箱に辿り着いた。

はぁ、こいつは先が思いやられるぞ。

「はぁ」

横にいるキョン子も一緒にため息を吐いた。

遅刻スレスレで学校に辿り着いた俺とキョン子は何故か教室ではなく、文芸部……つまり部室の前に二人で佇んでいた。完全に遅刻となったのだが、それでもここに寄らずにはいられなかった。というもの、見事に同じクラスかつ下駄箱も隣同士になっていた俺とキョン子の下駄箱の中にはそれぞれ一枚ずつ栞が入っており、それがいま最も会いたいヤツからの伝言となっていたからだ。

『部室で待つ』

相変わらず綺麗な字だったのだが明らかに情報量が不足しており、何時だよ？と心の中で突っ込みを入れながらキョン子の顔を見るとこいつも困惑した顔つきをしている。俺も今似たような顔をしていたのだろうが、出来ることなら一刻も早くこの世界の事について聞

きたかった事もあり、遅刻上等で真っ先に部室に寄る事で俺とキョン子の意見は一致した。
国木田には適当な理由をお願いし先に教室に向かってもらったので心配はしていないが、あえて心配の種を挙げるとすれば、アホの谷口が余計な事を言って俺たちのサボりがばれてしまう事くらいか。

コンコン。

ノックをしたが返事はない。お互いの顔を見合わせ恐る恐るドアを開ける。中に入るとそこにはこの異世界と切り離されたかのような様子の見知った美少女が一人、いつものパイプ椅子に座って分厚い本を読んでいた。俺とキョン子が部室に入りドアを閉めると、それを待っていたかのように本を閉じ、こちらを向いた。キョン子はというと、多少の驚きはあるものの自身が置かれている状況を理解したのか先ほどより随分と落ち着いて長門を見ているのが分かる。こいつも色々な非常識な事態と対峙してきて余計といえるほどの適応力が付いている事だろう。

「この時間で良かったのか？」

うなずく。

「それで俺とこいつに今の状況を説明して欲しいって言ったら、出来るか？」

うなずき、長門は静かに言った。

「このままだと６時間１２分５８秒後に世界が終わる」

■第四章：イッツ・グリーク・トゥ・ミー（前書き）

今更感アリアリな涼宮ハルヒの憂鬱の二次創作ものです。
原作の世界観が壊れるのが苦手な方や性転換ものが苦手な方は戻るのをオススメします。
それでもＯＫという方は今後もお付き合い頂ける様ですと嬉しいです。

今回も、やっぱりまだ導入です。話の進みが遅くて本当にすみません。

■第四章：イッツ・グリーク・トゥ・ミー

■第四章

「……そうか」

俺は黙って頷く。

長門よ、お前の言う事はいつも正しい。正しい故に毎回俺には話の展開についていけず、その回答の重大さが理解できてない。

いきなり見知らぬ世界に来て、この身に起こった出来事は何かと問うたつもりが、今から6時間後に世界が終わるといった訳が分からん回答が返ってきたのだから、はいそうですか、と言うしかないと思うのだが。

「あのっ、長門……だよな？話の流れが分かるように、詳しく聞かせて欲しいんだけど」

俺が感じた事をキョン子もやはり同じ様に受け取ったのか、考えていた質問をそのまま長門に投げかける。長門はジッとキョン子を見据え、暫くしてから呟くように言った。

「無理。32秒後に、涼宮ハルヒがここに来る」

「「なっ！？」」

国木田は俺達がここに寄るなんて知る由も無く、適当に保健室だとかなんかで誤魔化してる筈なのに、なんて勘が鋭いヤツなんだ。

「昼休み。すぐ来て」

長門がいつもより鋭い口調で短く言う。

「俺達がここに来ないとどうなる？世界が消えちまうってか？」

冗談っぽく言うが、長門は俺の方に向き直り、表情一つ変えずに頷く。

「冗談のつもりだったが……お前がそう言うのなら本当なんだろうな。それとハルヒのやつがここに来る前にもう一つだけ教えて欲しい。良いか？」

「なに」

「この訳の分からん世界は、俺らがいた世界とは別の世界なのか？」

長門は黙って僅かに首を横に振る。そして俺を指差す。

「あなたがいた世界……ただ」

長門が続けて何かを言いかけた瞬間、バタンッ！！と部室のドアが壊れるんじゃないかと思うほど勢いよく空け放たれた。

「あんた達、何サボってるのよっ！特にキョンキョンッ！今日の放課後は楽しみにしてるんだから、あんた達はぜっったいに逃がさないわよっ！」

「ちょっと待てハルヒ。そのキョンキョンって何だ？」

「キョンとキョン子の二人の呼び名じゃない？私が付けてあげたのに覚えてないの？あんたバカにますます磨きがかかってきたわね。キョンとキョン子だからキョンキョン。簡単でしょ」

はぁ、好きにしてくれ。

それから俺とキョン子は、ハルヒに首根っこを掴まれるとスゴスゴと部室を後にする事になったため、結局、長門が何を言いかけていたのかは分からずじまいだった。

「しっかし毎回思うんだが、キョンとキョン子が双子だなんて信じられないんだよなぁ」

午前に割り当てられた体育の授業中、駄弁っていた俺と国木田の横で谷口が言い放つ。

日が落ちるのが早くなったとはいえまだまだ残暑が続いており、ほぼ炎天下といっても良い蒸し暑さの中、男は体育館でバスケ、女はプールという体育教師の女尊男卑の思想に対して俺達は体育館脇でボイコットを実行しているところだった。

「どーゆう意味だ、それは」

「そのまんまの意味さ。お前らって似てるのはダルそうにしている態度だけで、顔は全然だよな」

「俺も元々顔のベースが良いんだよ、お前と違ってな」

「でも、僕も思ったんだけど、本当にキョン子さんとキョンって似

てないよね。キョン子さんって僕より背が小さいし」

「国木田までそんな事言うか。ってか、何でお前は同世代にさん付けしてるんだ？」

「あ～随分昔の事だからおぼろげにしか覚えてないけど、確かちゃん付けで名前を呼んだら顔を真っ赤にして殴られた事があって、それからさん付けで呼んでたような気がする。思ったより照れ屋だよね、彼女って」

「そんな事があったんだな。それと照れ屋ってところは賛同しかねるぞ」

ハプニングだったとはいえ、朝からパンツすがたを人様に晒す様なやつだからな。

「そういった言い回しとかは二人ともそっくりだよね～」

「うぐっ。まっ、まあ、そうかもしれん。つい今朝がたに双子設定が追加されたこの俺でさえ、外見以外は似ているところが多いと思ってたところだからな」

「あはは、ま～たキョンってば変な事いってるね。そんなんだから変な女の子が次々と寄ってくるんだと思うよ」

「ほっとけ」

「ところでキョンッ！キョン子ってどんな映画が好きなんだ？」

今朝会ったばかりのやつが映画という趣味を持ちあわせているの

かどうかすら分からんのに、ましてや好きなジャンルなどは俺が人の思考を読める超能力者でもない限り分からんだろ。と思いつつ、谷口の質問については尽くスルーする事に決めてる。今朝の仕返しだ。

そんな他愛のない話をしながら、あいつは……キョン子は今ハルヒと上手くやれてるのだろうかと心配になってきた。多分、向こうの世界じゃ男だった面子と仲良くプールなんて事をしなくちゃならんのだから気の毒な事この上ない。まあ今日は5組と合同での体育だから、何かあれば長門がフォローしてくれる……はずではあるが、先ほどの事もありキョン子がこの世界のハルヒや長門と上手くやれるかがとても不安だったのだ。

先ほどの事と言えば、その時に殴られた頭を擦るとまだ多少の痛みが残っている。

今朝、ハルヒに首根っこ掴まれて部室から連れ戻された後、教室に入ってみると席順が窓際の後ろからハルヒ、俺、キョン子の順番に並びが変わっていた。その順番を利用して俺とキョン子が授業中に情報交換を繰り返す姿を見て余程気に食わなかったのか、休み時間になるとハルヒは事ある毎に俺ら二人に絡んできやがった。

国木田の話によるとハルヒは俺とキョン子を同等に扱っていた様だが、キョン子の非道い扱いを側から見た者としてはその扱いの悪さが客観的に理解できたため、俺自身も少なからずの衝撃を受けたのだった。今後はハルヒの我儘に対してもう少し抵抗を試みるつもりである……まあ無駄だろうが。

少々話が逸れてしまったが、俺がキョン子のフォローに回るとハルヒのやつがますます怒り出して手が付けられなくなってしまいそ

うだったので、キョン子には悪いが静かになるまで成り行きに任せてしまった。触らぬ神に何とやらだ。
そしてキョン子は口には出さないが、この世界のハルヒが持つ女性としてのスペックの高さに少々辟易としている様だった。
俺から言わせれば人の魅力なんてものは千差万別であり、アホの谷口から声がかかるくらいだからキョン子もそこそこの高スペックを持ち合わせているため、それほど気にするなと伝えたところ、今度は英和辞典で頭を殴られたのである。今朝の件といい、こっちは心配して言ってやったというのにまったくもって割りに合わん。

それにしてもである。ぼんやりとだが男女の性別が逆転した世界について思いを馳せる。

まったく信じられずにいるのだが、もし仮にそんな世界があるとすれば、男になったハルヒ……ハルヒコといったか、その姿は古泉みたいな優男なのだろうか。それとも筋骨隆々の男なのだろうか。う～ん、想像つかんな。
長門や朝比奈さんは、十中八九、可愛いという形容詞が似合うちびっ子だろう。古泉もハルヒ同様に想像つかん上に、あまり興味もないからこいつはパスだ。俺の乏しい想像力から導き出されるのは男版のちびっ子長門とちびっ子朝比奈さんくらいだな、うん。

そんな想像もつかない様なアベコベな世界でキョン子のヤツは俺とほぼ同じ目にあってきたんだろう。
例えば、朝倉的な凶暴な宇宙人に襲われたり、大人になった未来人が会いにきたり、超能力者と一緒に異空間に行ってデカイ人や昆虫と対峙したり……と、まあ、ちょっと上げただけでもこの半年の間に我が身に降りかかったバカげた騒動がなんと山盛りだったかが

分かる。
特別な力がある訳じゃあないが、俺は男の身だから、それらの非常識な事態にまだ何とかついていけたのだろうが、キョン子のヤツはごく普通の女、いや、むしろ身体的にはちびっ子の部類に入る女なのだ。相当、無理をしているに違いない。
そう思うと、やはり守ってやらんとな、という母性本能というか父性本能といったものが、同じ立場であるこの俺に芽生えるのは仕方ない事であり、俺的には発育が悪い妹が一人増えた気分になっていた、と言えばキョン子に対してどの様な感情を抱きつつあったか分かって貰えるだろうか。

「ところでキョン！キョン子って家じゃどうなんだ？」
鼻息が荒い谷口がいきなり目の前に広がった。相変わらずウザいやつだ。
「先刻から俺の質問を無視するなよ～、キョン」
「……お前がしょーもない質問ばかりしてくるのが悪い」
それに加えて今朝の態度が気に食わん。と、心の中で付け加える。
「どっこっがっ、しょーもないんだよ。この年頃の健全な男子なら知りたいと思う事なんて、こんな事ばっかりだろが。興味ないなんて言ったら、逆に疑っちゃうぜ」
この俺に、お前の価値観を押し付けるな。

「偶にキョン子と脱衣室とかで鉢合わせになったり」

生憎、今朝が初対面だ。

「テレビとか見てるときに無防備な瞬間があったり」

今朝、無防備にも程がある瞬間があったが。

「トイレのドアを開けたら用を足してたり、って感じで、何かイベントがあったりフラグが立ったりするような事とかって一緒に暮らしてて無いのかよ？」

……こいつとはもう友達を止めた方が良いのかもしれん。

「あーもうっ！！これ以上、無視すると本当に泣くぞ。キョンッ！」

どうぞ、ご自由に。その後、アホの谷口が泣いたかどうかは定かではなかった。

茹だる様な暑さの中、そろそろ体育の授業が終わりの時間に差し掛かってきた。

俺達は1秒たりともバスケをプレーはしちゃいないが、無理に参加してやる気のあるバスケットマン達の邪魔をしては悪いと思い、この授業は終始駄弁っている事にした。

体育教師からは鋭い視線を感じており心証は確実に悪くなったのだろうが、知ったこっちゃない。こんな日に体育館でバスケなどをやらせようとするお前が悪いのだ。出来ることなら俺らもプールで

のんびり水遊びをしてたかったんだがな。

そう思いながら、体育館の開いたままになっているドアからプールの方を見てみたが、あいつらの様子はさっぱり分からない。その行為は周囲から見れば覗きにしか見えず、犯罪行為スレスレだろうと思い慌てて向きを変える。

向きを変えた先には空には雲一つない抜けるような青空と、そして学校の花壇には季節柄なのかコスモスの花が徐々に咲き始めている事が分かり、残暑は厳しいのだが、そこかしこに秋の気配が近づいているのが見てとれる。

とどのつまり、今日という日は長門の言うところの世界の終末が来る日としては似つかわしくないほどの穏やかな一日であり、この様子からは誰もそんな事態が差し迫っていると想像出来ないだろう。これから一体どんな事が起こり、それは俺達の身に起きた事とどのような関連があるというのだろうか？

それらの答えは……残念ながら俺の頭じゃやっぱり分からなかった。

■第五章：マジでコスプレ5秒前（前書き）

涼宮ハルヒの憂鬱の二次創作ものです。
原作の世界観が壊れるのが苦手な方や性転換ものが苦手な方は戻るのをオススメします。
それでもＯＫという方は今後もお付き合い頂ける様ですと嬉しいです。

■第五章：マジでコスプレ5秒前

■第五章

「じゃあ、説明して貰おうか」

昼休み。

先ほどのやりとりで未来に帰れなくなったと言ってマジ泣き状態の朝比奈さんと何時になく真剣な表情の古泉、そして俺とキョン子が長門の前に勢ぞろいしている。

「うまく言語化できない。情報の伝達に齟齬が発生するかもしれない。でも、聞いて」

いつぞや聞いたことある台詞だな。そう思っていると長門は静かに語りだした。

「今から21分13秒後、この時空間は別の時空間との連結を開始する。そして1時間51分42秒後には、2つの時空間の融合が完了し、消滅する」

「……」

「既にその影響が出始めている。情報統合思念体やそれに準ずる情報生命体の活動は著しく阻害され、99.9982%活動停止の状態を強いられている。現在、この地球上に存在する対有機生命体コンタクト用ヒューマノイド・インターフェースは情報統合思念体との連結を解除して独自に行動している」

「……」

「また、この時間平面は他の時間平面との連結も強制的に解除・再構築を繰り返しており、朝比奈みくるが属する機関等との連絡も一切取れない」

「……」

「宇宙開闢から今に至るまで、今回の様なケースは初めて。原因は4ヶ月前に涼宮ハルヒが新しい時空間を作り出した事が起因していると推測する」

「……」

なんですと。

「これは……思ってたより、深刻な事態の様ですね」

暫く経って、古泉が呻く様に呟く。

「待ってくれ」

混乱したまま俺は言う。

「正直に言おう。お前が何を言っているのか、俺にはさっぱり分からない」

「……長門さん、僕が理解した内容を、多少肉付けして皆さんに説明しても宜しいですか？」

「かまわない」

「ありがとう御座います。間違っていたら訂正をお願いしますよ」

長門が僅かに頷く。

「では……皆さんは、異世界といったものを今までに何回かご覧になったかと思います。もちろん僕が出入りする閉鎖空間もその一種です。でも今まで見てきたのは、あくまでこの世界が内包する異世界であり、この世界の一部でしかありませんでした。そこまでは良いですか？」

確かにそうだ。思い返せば、朝倉が作った世界や閉鎖空間、巨大カマドウマの世界などはどれもこの世界の延長線上の代物だった。

だが、ちょっと待てよ……一つだけ、それに該当しない世界があったじゃないか？

「俺が」「わたしが」

俺とキョン子が同時に声に出す。そう。俺やキョン子が涼宮ハルヒ……もしくはハルヒコに連れられてった、あの灰色の世界である。

「そうですよね。異世界といっても、先ほど説明した中には当て嵌まらない異世界があります。それはあなたたち二人の記憶にも強烈に残っているであろう、忌まわしきあの世界もそのうちの一つです……そこで関係してくると思われるのが平行世界の存在です。皆さ

んは平行世界という言葉はご存知でしょうか？」

「えぇ、もしかして空間柱群の事？」

先ほどまでマジ泣き状態だった朝比奈さんが急に驚いた様子で声を上げた。

「……なるほど、空間を柱の束に例えているのですか。未来人の方々はその様に捉えているのですね。

現代では主に漫画やアニメでの主張が目立ちますが、昨今サイエンスの分野でも素粒子論や超弦理論といった分野から仮説としても取り上げられつつあるシロモノです。私たちのいる宇宙からは見えないところに別の宇宙が数多くあり、それらの宇宙はこの宇宙と多くの類似点や相違点を抱えて存在している、と考えられています。我々はそれら別の宇宙の総称を平行世界……すなわちパラレル・ワールドと呼んでいるのですよ」

途中、妙に刺々しい雰囲気を古泉に感じたが、疑問点を解消したい気持ちが勝り質問を続ける。

「それが何で、くっついたり消滅したりするんだ？」

「それは……」

「それは……空間柱同士において近似的接触があったからだと思います」

おやっ、朝比奈さんから禁則事項的な発言がっ！？

「どうやらわたしがいた時間平面との連結が解除されたせいか、精

神操作や強制暗示が解けてるみたい。それで……空間柱同士の近似的接触の事ですが、キョンくんには以前この世界は時間平面が積み重なって出来てるって説明をしたよね。時間平面が一枚の紙だとしたら、空間柱というのはその紙が積み重なった塔みたいなもの、と想像してみて」

Ａ４のコピー用紙が高く積みあげられている机を一つ思い浮かべる。

「わたしがいた時間平面では、その塔はどうやら一つでなく、他にも数多く存在していると考えられてるの」

教室のすべての机にコピー用紙が高く積み上げられている景色を思い浮かべる。なんともシュールで異様な光景を思い浮かべちまったもんだ。

「本来であれば、それらは全く干渉しないまま高く高く積み上がっていくと推測されているようだけど……わたしの考えでは、そこにあるイレギュラーが発生した」

「ハルヒのあれか……」

「そう、涼宮さんが作り出した世界……空間柱の途中から新しい空間柱を作り出した事で、別の空間柱に近づき、何かしらの干渉が発生したんだと思う。そして２つの空間柱は引かれ合い徐々に近づいて、遂にはこの時間平面で衝突に至り、それ以降の時間平面が互いの空間柱群から崩れ落ちてしまい、やがて全てが崩壊する、といった感じだと思う」

「随分と詳しそうですが、未来でもそんな事があったんですか？」

キョン子が感心したように尋ねる。

確かにそうだ、というよりも何時もの朝比奈さんとは比べ物にならないくらい聡明に感じる。もしかすると、いつもは精神操作や強制暗示とやらでボロが出ないようにワザと弱体化しており、今の聡明な朝比奈さんが本来の姿なのかもしれない。

「いいえ。論理的には確立されているんだけど、そんな事はわたしがいた時間平面でも一度も観測されたことが無いの。実際には、起こせた事がないといった方が正確かな。わたしがいた時間平面でも他の空間柱群や亜空間に影響を及ぼす様な技術はまだ無かったから……」

「この二人の推測はほぼ合っている」

そこで長門が再度口を開く。

「つい最近まで情報統合思念体もその様な技術を持ち合わせていなかった。しかし情報統合思念体は、涼宮ハルヒが作り出した世界を参考に亜空間への干渉方法を、および、あなたと連絡した時を参考に伝達手段を確立する事に成功した。それによって別時空間の存在が解明されつつある。現在までに情報統合思念体が把握している時空間は１９４，２２１、その中でアクセスが可能だった時空間は１つ」

そして長門はキョン子を指差して言った。

「そして、あなたはその時空間の住人だった」

やれやれ。

空腹でぶっ倒れそうだったのも忘れ、もう色々とお腹いっぱいの状態だった。これ以上の知識の詰め込みはご遠慮願いたいが、そういう訳にもいかなかった。

長門の話では、後１０分くらいで終末へのカウントダウンが始まるっぽいからな。

「先刻の消滅の話が本当だったとして、それを止める手立てはあるのか？」

「時空間同士の連結を解除するには亜空間上でコレを投げつける必要がある」

そう言うと長門は手のひらにある石ころの様なものを皆に見せた。よく見ると石ころは２つあり不思議な光が中から漏れでている。なんぞこれ？

「これは反重力時空間縮小装置。効果は２つ。１つ目は時空間連結の解除。シミュレーションでは亜空間で使用しなければ無意味との結果が出ている。２つ目は時間平面の限定連結。時間を限定する事で他の時間平面との行き来が出来ない問題を解決する。その効果は２４時間。一次転移が効果発動から２４時間以内であれば時間平面の移動が可能」

「２つ目の効果が良く分からんが……なんか微妙に使い勝手が悪い様な感じがしないか？」

僅かだが、長門が悲しそうな顔をする。

「それと長門さんは1つ目の効果について亜空間で使用しなければ無意味と仰いましたよね？」

古泉が真剣な顔で聞く。

「そう」

「ではお聞きしますが、誰がどうやってそこまで行くんです？」

「……」

長門は黙ってキョン子を指差す。

「……やはりですか。段々と読めてきましたよ。長門さん、もう一つお聞きしても宜しいですか？」

「その質問は受け付けられない」

「でしょうね。……いやはや何が普通なものか、実に羨ましい。それにしても長門さん、あなたはいったい何を隠そうとしているんですか？

また、少なくとも3つ目の効果については当の本人に説明をして差し上げるべきでは？」

「古泉一樹。あなたはそれ以上の言動を慎むべき」

長門と古泉は先刻から何を言ってるんだ？

何にせよ長門はキョン子に危ない橋を渡らせようとしている事だけは確かな様だ。それはちびっ子には少々荷が重いと俺の直感が言っている。

「長門よ。その役割って俺じゃダメなのか？」

「駄目。あなたにはあなたの役割がある」

俺の役割？

「そう。それは涼宮ハルヒとその異世界同位体の邂逅を防ぐこと」

異世界同位体？なんだそれ？

「異世界同位体とは、別時空間のもう一人の自分の事を指す。時空間連結が開始されると1つの時空間上に二人の同位体が同時に存在する事になる。涼宮ハルヒも例外ではなく、別の時空間に存在する涼宮ハルヒの異世界同位体と同時に存在し、それは思考回路が似通っているために、何もしなければ互いに出会ってしまう可能性が非常に高い。

異世界同位体の接触は、異時間同位体との接触と同じく極めて危険。ましてや情報フレアを噴出させる涼宮ハルヒの様な異世界同位体同士が邂逅した場合、どの様な事が起きるか予測不能。最悪、時空間融合前に世界が消えてしまう可能性も考えられる」

こんな状況になっても、なお気にかけてやらんといかんとは、まったくもってハタ迷惑なヤツだ。

「こちらの時空間ではあなたが、向こうではあなたの異世界同位体が、それぞれ対応する手筈になっている。

時空間連結の解除まで涼宮ハルヒを涼宮ハルヒの異世界同位体と会わせない様にする事。それが、あなたの役割」

その後、長門はキョン子を呼んで何かを話し込んでおり、キョン子のヤツもそれを真剣な表情で聞いている。

それにしたってハルヒと、ハルヒコってヤツを会わせない様に……か。何をすれば良いかまったくもって想像つかんな。俺の異世界同位体とやらも一緒に妨害すると聞いた時に、それはキョン子の事なんじゃなかろうかと一瞬本気で考えたが、異世界同位体の接触は危険だと言ってたので俺の勘違いなのだろうな、きっと。

それにしても時空間連結が開始されたら他の人間はどうなってしまうんだろう。やはり異世界同位体同士が出会って危険な状況になるのだろうか？

う～ん。……ええい、こんがらがってきた。もう考えるのは止めにしよう。

考えるのを止めて長門の駒に徹しよう。そう思った矢先に長門がこう言った。

「全員、ここにある衣装に着替えて欲しい」

……そこには古泉の関係者、おそらく「機関」の連中が用意したのであろう、本日のメインイベントになるはずだったＳＯＳ団主催のコスプレ大会用の衣装が大型のダンボール７箱分ほど用意されているのが目に留まった。

いかん、このイベントの事をすっかりと忘れてた。が、この状況で着替える必要なんてあるのか？

「着替えて」

長門は何度も言わせるなといった感じなのか、もう一度、今度は命令口調で言い放つ。

敢えて、俺から　もう一度言わせて欲しい。この状況、着替える必要あるのかと。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7087w/

キョンの憂鬱（その１）

2011年10月10日02時58分発行